

矢内原伊作の本

I

顔について



みすず書房

矢内原伊作の本

1

顔について

みすず書房

矢内原伊作の本 1

顔について

1986年10月9日 印刷

1986年10月20日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京 0-195132

本文印刷所 三陽社

扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1986 Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-00771-1

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目 次

目 次

顔について	1
旅について	45
海について	59
山の感想	99
水との対話	115
火との対話	133
石との対話	151

顔
に
つ
い
て

顔

顔について

人の数だけの顔がある。すなわちすべての人はそれぞれの顔をもち、すべての顔はほかのすべての顔と異なっている。だが人は単にそう思っているにすぎない。

人はけっして自分の顔を見ることができない。人は古ぼけた一枚の写真を私につきつけ、これが私の顔だという。だが幸いなことに、そこに見られる顔が私の顔であることを保証するものは何一つない。それは見知らぬ他人の顔である。そうでなければ、どうして写真を撮ろうなどという気になるであろうか。撮影せられた顔がけっして帰ってくるのではない過去のものであり、容易に否定することのできる一瞬間のものであるということがわれわれを安

堵せしめる。つまり写真は實際よりもよくうつるか悪くうつるかどちらかなのである。それならばその實際の顔はどこにあるのか。鏡のなかに。しかしこの怖るべき機構も、われわれの顔に関しては写真と同様、その能力ないし効果を十分に發揮するようにはけっして利用されない。無から有が生ずるように、何の前触れもなく不意に鏡の奥にあらわれてくるのは、いつも見知らぬ他人の顔である。鏡は顔をうつさない。鏡がうつし出すのは髭ののび具合であり、白粉の濃さであり、口紅の色である。泉のなかのもうひとりの自分の顔に魅せられながらどうしてもそれを捉えることができず、ついに一茎の花と化したナルシスの物語は、鏡のなかに自分の顔を見てしまった者の悲劇であろう。われわれは自分の顔を見ることができず、また見ることを願ひはしないのである。しかしナルシスはやはりわれわれのうちに住んでおり、住んでおればこそわれわれは自分の顔を見ることを怖れるのである。

人は顔をもっているのではない、もっていると思つているのである。この簡単な事実のなかにもすでに顔というものの本質が顔を見せている。顔というものの、しかし顔はものではない、ものならばもつこともできよう、見ることもできよう。しかし人は顔をもつことも見ることもできない。人が顔をもつのではなく、顔が人なのであるから。もつとも、この事情は顔に限らず、身体そのものについていわれることであろう。デカルトがいったように「私は

水先案内が船に乗っているように、ただ私の身体のうちに宿っているのみではないのである。しかし手足はなおわれわれにとつて道具という意味を、したがってまたものという意味を脱してはいない。人はやはり手足をもつのである。それゆえに壺には手があり机には足がある。しかし顔のあるものはない。顔を合わせる、顔出しする、顔つなぎ、顔触れ、顔みせ、これらの言葉において顔は人間そのものを意味している。しかしこれらの言葉がすでに示しているように、顔は単に人間の本質を意味しているのではなく、まさに人間の本質が顔にあらわれ、他人の顔と合わされ、つながり、触れあい、他人のなかに出され、他人に見られるという点にあることを意味している。それゆえに顔はまた体面であり面目である。顔を立てる、顔を汚す、顔が潰れる、顔に泥を塗る、顔にかかわる、顔向けができぬ、合わす顔がない、など。顔はおもてであり、表面であり、表面は外面であるが、心はまた内面である。顔において内部と外部とは一つである。面の皮が厚いとか鉄面皮とかという言葉があるにしても、それらの言葉は顔が外被であることを意味するよりは、むしろ顔が鉄の面ではなく、その皮が本来薄いものであることを意味しており、それゆえに面の皮が厚いとか鉄面皮とかという言葉はそれ自身ただちに一つの性情をあらわしているのである。身体は衣服によって覆われるが、われわれは顔を隠すことができない。たとえば顔をそむけ、面を伏せても、そむけ

られ伏せられた顔がすでに一つの顔なのである。人は自分の顔が眼に入らないというただそれだけの理由で、自分は顔にあらわれているようなものではないと考え、顔以外のところに別の自分がいると思っっているが、そういう思いもまた顔にあらわれるのである。いわば人は他人の眼からもっとも慎重に隠すべきもの、もっとも慎重に隠しているもの、もっともあらわな形で四六時ちゅう人びとの前に曝しているものである。面を曝すという言葉はすでに衆人の前で恥辱を受けることを意味しているが、しかし顔を曝していない人はないのである。

それゆえに顔は隠されなければならぬ。帽子というものもかつては顔を飾るよりも顔を隠すためにあったのであろう。飾ることはすでに隠すことにほかならない。そして全身を覆っていたヴェールが一方においては帽子として頭部におしあげられ、他方において衣服として肩からかけられたとき、人びとはすでに仮面を発明していたのである。しかしギリシャ・ローマの俳優たちの用いた仮面は、顔を隠すためよりはむしろ、広い野外劇場の観客のために顔をよくあらわすためのものであった。この場合、あらわすものという顔の本質は仮面によって逆に保証せられたのである。わが国に伝わった伎楽面・舞楽面においても事情は同様であった。それは人間の矮小卑賤な顔を隠して神々の姿をあらわすものであると同時に、激発

する感情の瞬間的誇張的な表現であった。それらの影響のもとに発生してきた能面が瞬間的激情の表現にまずその卓越した技術の領域を見出したのは当然であろう。しかし神々ではなく日常的な人間が舞台に登場してくるにつれ、瞬間的表情の誇張的表現はかえって表情の固定化を結果する。このことはそれらの面（赤鶴をその代表的名工とするいわゆる力道の面）が、もちろん単に固定せられた表情の誇張的模写ではないにもかかわらず、つねに後ジテのわずかな時間に、しかも人間ではない神怪鬼畜としてのみ舞台にあらわれることから察せられよう。鎌倉時代から室町時代にうつり、日常の生活が多く舞台に上せられるに随って「尉面」が完成を見、ついで「女面」「男面」の象徴的表現がこの幽玄の芸術を不朽のものとした。（いうまでもなく、能はその成立の当初から神怪鬼畜とともに老人や女や男を登場させていたのであるが、いまは単に類型としての面の技術的完成について語っているのである。それはまた能そのものの発展深化と表裏をなしているのである。）神怪鬼畜の面が激発する感情の瞬間的誇張であったのに対し、尉面の親しみ深い老人の顔はいちじるしく写実的である。それは瞬間の表情ではなく平常の顔であり、誇張ではなく写実である。しかし単なる写実はいわば面の否定であり、個性の否定であり、複雑な感情の変化には堪ええない。尉面が多く、神社の来歴を物語ったり、名所を教えたりするような説明的な役柄に用いられる

ゆえんである。女面においてはそうではない。これは誇張でもなく写真でもない。それはいかなる表情をもたないことによってあらゆる表情をもっており、いかなる顔にも似ていないことによつていかなる顔にでもなることができる。表現はただ一つのをあらわすが、象徴は隠すことによつて一切をあらわすのである。そしてこれはまた顔の本来のあり方にかならない。女面においてその最高の象徴性に達した能面は、その象徴性によつて、いわば顔そのものの象徴となつたのである。

したがつて喜怒哀樂を顔にあらわしてはならぬ。興奮した顔はつねに醜いのである。それは単に受動的な顔であり、内面を失つた外面にすぎない。すぐれた精神は顔の奥深くに自らを秘めながら、しかもその奥深いところから微妙な均衡をもつて顔を支えている精神であり、絶えず誇張し動揺する表情は浅い精神の証左である。微笑が美しいのもこのゆえである。

肖像画あるいは肖像彫刻についての考察はさらにこのことを明らかにするであらう。モデルを前にして芸術家は多くのデッサンを繰返す。デッサンは繰返されなければならぬ。なぜならそれは瞬間的な顔の動きを捉え、顔は絶えず動くからである。一つの表情は他の表情を打消し、一つのデッサンは他のデッサンによつて打消される。そして長い観察と無数のデッサンのはてに肖像ができあがるとき、それはすべてのデッサンを打消し、どの瞬間の表情を

もあらわさないように仕上げられるのである。それゆえに浅い精神は肖像画あるいは肖像彫刻の対象となり得ない。怖るべきは写真屋ではなく画家であり彫刻家である。

ところで裸体の肖像画はないということに注意しよう。裸体は画家や彫刻家の好んだ題材であったが、肖像彫刻はつねに衣服を纏っており、裸体彫刻には顔のないのが多いということに注意しよう。この注意はわれわれをかなり遠方にまで導くのである。

仮面というものはかつてギリシャ・ローマの野外劇場に見られたばかりではない、お神楽や能の舞台に見られたのみではない、われわれが仮面をつけるのは仮装舞踏会の時のみではない、ということをや右の事実が示している。いいかえれば、顔には裸体がない、ということをや右の事実が示している。裸の顔というものはない。始めから裸であるからではない、脱ぐことのできない衣裳を始めから纏っているからであり、むしろ顔そのものが衣裳だからである。

衣服は寒暑に適応してはいるが、寒暑を防ぐためにだけあるのではない。人は生れ落ちるとすぐに衣服を着せられ、死ぬまで脱がず、死んでも衣服を着けて棺桶におさまってあの世に行くのである。衣服を纏うことによってわれわれは動物ではない人間の世界、流行や社交や儀礼や法律などのある人間の世界に歩み入るのであり、学生は学生服を着ることによ

って学生となり、軍人は軍服を着ることによって軍人となり、要するにわれわれは自己の服装によって自己となるのである。衣服を失うことは自己を失うことにほかならない。(モデルは裸体になることによって自己を獲得するが、これは彼女にとって裸体が最高の衣裳であることを意味するのであり、レビューの舞台や夏の海岸に於ける半裸体がそれ自身立派な衣裳であるのと同様である。)それゆえ裸になるときわれわれは自己を頼りなく感ずるし、背広を着た軍人はもはや突撃しないであろう。したがって意気沮喪している婦人に向かって、晴衣を着て胸を張りなさいと忠告することは無益ではない。晴衣は胸を張らすであろう。そしてそれは顔をも晴らすであろう。顔が晴れ晴れとするとき、胸の晴れないことはないのである。してみれば、顔とは衣裳以外の何であろうか。すべての衣裳は顔と調和し顔をひきたせるようにデザインされるのである。裸の全身を鏡にうつしてみたまえ。君の陽に灼けた顔あるいは貴女の化粧のあとの見える顔から下半身が頼りなげに遊離し、行きどころを失い、困惑し、狼狽し、顔との結びつきを回復するために衣裳を求めているのが認められるであろう。仮面を脱げ、と人はいうが、仮面を脱ぐことはただちに別の仮面をつけることにほかならず、素面というものはどこにもないのである。素面というものがない以上、われわれの努めるべきは仮面を脱ぐことではなく、よりよい仮面をつけることであろう。

このことからただちに化粧の意義が示される。裸の顔がない以上、化粧をしない顔はない。化粧の歴史は人類の歴史とともに古いのである。古人は白粉を称して「顔の衣」と呼んだが、化粧は顔の衣裳であり、衣裳がたんに外から纏われるものではなく逆に人間存在を支えるエレメントであったと同様、化粧は顔のエレメントである。化粧は衣裳とともに、俗にいわれているように「おつくり」であり「お拵え」であり、しかも顔が人の中心として衣裳を支配する以上、「顔をつくる」「拵える」ことによって、顔は本来の顔を取戻し、それによって人は本来の自己を取戻すのである。化粧をしていない顔は、衣裳のない身体と同様、動物の顔である。人前に出られない顔であり、自己を失っている顔であり、脆い顔である。能役者は能衣裳をつけるように能面をつける。能役者が能面をつけるように歌舞伎役者は顔をくまどり眉を画き白粉をつける。そしてそのように現代の女性はパーマネント・ウェーブをかけ、眉をひき、頬紅をつけ、口紅をぬるのである。

しかし顔は必ずしも単に眉墨や頬紅や白粉や口紅等によってのみつくられるのではない。それらが単に外から附加せられるものではなく本質的に顔を「つくる」ものであるということは、じつは顔そのものが化粧であることによってはじめて可能なのであり、それゆえに眉墨や頬紅や白粉や口紅等は顔を生かすために用いられなければならない、また用いられ得るの

である。健康な血色によって彩られた頬は美しく、まして深い叡智を湛えた眼は美しい。自然はたしかに美しいが、自然の美しさを知ることができるのはただ化粧の美しさを知る者のみである。してみれば表情もまた一つの化粧といわなければならぬ。人は化粧によって顔をつくるように表情によって感情をつくる。顔色は気分である。しかし気分が外にあらわれて顔色となると同時に、それ以上にむしろ気分は顔色にあらわれることによってはじめて気分となる。表情は感情の表現ではない、おもての感情であり、それ以外のところに感情があるわけではない。化粧によって流行を模倣するように、表情によって人は感情を模倣する。しかし表情以外のところに感情はないのであるから、感情を模倣するとは表情を模倣することにはかならない。拳を固めてふりあげることによって怒りを覚えるように、面を伏せることによってわれわれは失意する。掌をひろげて怒ることができないように、顔を顰めて喜ぶことはできぬ。笑う人は人を笑わせ、涙は涙を誘うのである。人生が自己形成であり、生きることがすでに一つの技術であるならば、それは何よりもまず表情に対するこの訓練にあることはたしかであらう。

表情に対するこの訓練、あるいは化粧による「顔づくり」は、しかしいうまでもなく、人生が自己形成であり、生きることがすでに一つの技術であるということの本来の深さにおい

て理解されなければならぬ。なぜならこのことは顔が本質と現象、内面と外面との一致であることに基づいているのであるが、この一致は容易に失われるからである。この一致が失われるとき、顔はもはや顔でなくなり、化粧はもはや化粧であることをやめる。このとき化粧は単に外面を粧う手段となり、表情は人を欺くものとなり、顔が単なる外面となることによって人は内面そのものを喪失する。顔は便利なものなどといって、人はポケットや鞆のなかにいくつもの顔をしまいこみ、時に応じてそれをだしたりひっこめたりする。ついにはもうかけがえがなくなり、顔ともいえないような顔をぶらさげているようになるのである。人の数だけの顔がある。だがそういう顔は稀である。一人の人が沢山の顔をもち、それによって逆に多くの人が一様の顔となる。顔の復讐による顔の喪失であり、顔の喪失は人間の喪失にはかならない。顔のない幽霊はたんに墓場や怪談のなかにのみあらわれるのではない。顔を喪失したこれらの幽霊たちが昨日も今日も銀座街頭を歩いているのを人は見るであらう。歩いているところを見ると、彼らはまだどうやら足は失っておらず、したがって幽霊ではないらしいのだが、足ならば犬や猫にもあるのである。